

ISA トロント大会参加報告

国際交流委員会

金子雅彦（防衛医科大学校医学教育部）

2018年7月15～21日、カナダのトロントで第19回国際社会学会（ISA）世界社会学会議が開催された。会場のメトロ・トロント・コンベンション・センターはユニオン駅に直結していて、観光スポットであるCNタワーの隣である。今回の会議には101カ国から5000人以上が参加した。

日本保健医療社会学会が主に関係するRC15（Research Committee 15: Sociology of Health）での様子を中心に紹介する。RC15はISAの全RCの中でも会員数はかなり多い部類に入る（200人以上）。またRC15における日本人会員数はアメリカに次いで2番目に多い（25人以上）。日本人研究者が企画や発表を行ったセッションは16～21日の間毎日必ず1つはあった（15日はISA会長主催セッションのみ）。時間帯が重ならない限りできるだけそうしたセッションに参加した。セッション数は4つで、テーマは移民の健康、ヘルスケアのガバナンス、死や終末期、病をめぐる言説だった。発表数は報告者が把握している限り15報告あった。テーマは患者ないし住民参加、医療制度、医療化・脱医療化、死や終末期をめぐる諸問題、健康増進、患者や弱者の語りや体験記など多岐にわたっていた。基本的に発表形式には、口頭発表（oral presentation）とペーパー配布（distributed paper）がある。ただし、ISA大会に参加したことのある人はご存知だと思うが、ペーパー配布でも数分間の口頭発表の機会が与えられることがある。今回も報告者を含め、多くのセッションでペーパー配布の人も時間は短いが口頭発表していた。

朝倉隆司監事はRC49（Sociology of Mental Health and Illness）の会長を務めていて、今回のトロント大会でも多くのセッションを企画していた。報告者はそのうちの1つのセッション（自殺行動やうつがテーマ）に参加した。

個人的には、まずラウンドテーブルで発表した。RC15のセッションは報告数が多いため、一般的なセッションでは、発表者も質問者も早口になりやすい。それに比べると、ラウンドテーブルは対面方式であり、時間の流れがゆったりとしていた。発表の途中で質問されたりすることはあるが、参加者の間でなごやかな空気が醸成されやすいと感じた。またRC25（Language and Society）とのジョイント・セッションを企画した。最終日の21日で大きなトランクを抱えながら会場内を移動する人も散見される中、セッション関係者以外の参加者も10人以上いて、質疑応答も活発に行われた。セッションを無事終えることができ、安堵した。また、企画者側の苦労も今回改めて知ることができた。

細田満和子会員が2018年から2022年までRC15会長を務めることがビジネスミーティングで報告された。2020年7月14～18日にブラジルのポルト・アレグレで第4回ISA社会学フォーラムが、2022年7月24～31日にオーストラリアのメルボルンで第20回ISA世界社会学会議が開催される予定である。日本人研究者の積極的参加が近年目立っており、国際発信が活発になっていると感じている。この動きが今後も進展していくことが期待される。